



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人間存在のダイナミックス（一）：序論的考察
Author(s)	伊藤，勝彦
Citation	北海道大學文學部紀要，12， 69-82
Issue Date	1964-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33282
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_P69-82.pdf



人間存在のダイナミックス（一）

―序論的考察―

伊藤 勝彦

人間存在のダイナミックス (一)

序論的考察

伊藤 勝彦

本稿の目的は、危機的状況になげおかれたときの人間存在のダイナミックスを説明することにある。今日において、人間は自己の全体存在が解体し、無に直面する危機の中にあると考えられる。危機的状況におかれたとき、人間は、普通の場合よりもはるかに明確にその力動的構造を露呈すると考えられるのである。

ダイナミックスという言葉からは、当然、精神力動学 *psychodynamics* とか、グループ・ダイナミックス *group dynamics* というような、今流行の学問が連想されることであろう。私がいう人間存在のダイナミックス⁽¹⁾もまた、これら学問の影響下に構想されたものであるが、これらよりも、さらに全体的、統一的視点に立つて新しい人間像を樹立することをめざすものである。

精神力動学⁽²⁾というのは、フロイトの学説から出発し、主として異常心理的な問題場面において、人間行動の歪みを無意識的動因から理解しようとするものである。例えば、そこでは、自我の動きとその失敗が、抑圧、昇華、同一視、投射、転位、反動形成、退行などの力動的概念によって説明される。フロイトの出現以来、人間はひとつのエネルギー体系ということになり、心理学はパーソナリティの内におけるエネルギーの変形や交換を研究する一コ⁽³⁾の力学と

いうことになったのである⁽⁴⁾。ただし、本来の精神分析学は、個人のパーソナリティの発達を幼時からの成長の経過に即して、生活史的に追求するという手法を固執したため、社会的な、対人関係の面の究明がおろそかになるという憾みがあつた。そこで、新しいダイナミックスは当然、これまでの生活史的、時間的な、いわば、縦の力学⁽⁵⁾に對し、社会的、文化的な、横の要因を強調し、フロイト的な生物学主義には缺けていた、対人関係の発達の障害といった社会心理学的見方を發展させてゆくことになる。

グループ・ダイナミックス⁽⁶⁾というのは、K・レーヴィンの場の理論 *field theory* にもとづいて、集団場面における人間行動を支配する力を実験的に研究しようとするものである。レーヴィンはグループを一つの力学的全体⁽⁷⁾と考え、一群の人びとのあいだに相互依存性⁽⁸⁾が存在することをグループの根本特徴と考えた。例えば、集団は成員たちをその集団の中にとどまらせるように誘引する凝集力⁽⁹⁾をもちその誘引の強さは成員によつて異なることを分析した。また、一旦、集団が形成され、集団生活が続けられていると、成員たちの意見、態度、行動などを斉一化するように圧力 *group pressure* が働くことを明らかにした⁽¹⁰⁾。つまり、グループ・ダイナミックスは精神力動学とは反対に、人間行動をあくまで集団的場面において問題にしたために、集団における斉一化の原理に抗する個人の自主的なあり方を浮彫りにすることができないという缺陷をもつていた。そこで、グループ・ダイナミックスのように、人間存在をあくまで集団的場面において、社会的、空間的な、いわば、横の拡がりから考究す

る方法に対し、生活史的、時間的な、縦の力動学の有意義性が再び強調されねばならなくなる。

では、わたしたちの人間存在のダイナミックスVというのは、人間存在をあくまで、社会関係における個人(individual-in-community)として、個人の生活史的、時間的な、縦のつながりを問題にすると同時に、社会的存在としての、空間的な、横の広がりをも問題にする総合的視点にたつものだといえ、それで足りるのであるか。もしそれだけのことであるならば、人間存在のあり方を生物学的、心理学的要因から説明すると同時に、文化的、社会的要因からみることを強調するフロムやサルヴァン、ホルナイなどの新フロイト派の主張となんら異なることがないことになってしまう。もちろん、人間存在を生活史的、時間的な縦の面と、社会的、文化的な横の面の両方から立体的にとらえることが、ダイナミックな人間観の根本前提であるということができる。しかし、人間存在のダイナミックスはそれだけに終始するものではない。フロイトもレーヴィンも、あるいは新フロイト派もともに見失っていたなにかここでは強調されなければならない。

フロイトもレーヴィンも、人間存在の現実がいかにあるかを客観的に分析しようとする。しかし、人間存在はいかにあるべきか、いかなる方向に進むべきかという観点を根本的に欠いているのである。もちろん、彼らはあくまで科学をめざしたのであり、哲学や倫理学にのみ許される価値の観点を缺いたのは当然のこととする見方もあるだろう。しかし、人間存在の現実が目的志向的、あるいは、

価値志向的なものであるとしたならば、その側面を捨象して論ずることは、もはや、人間のあるがままの姿をとらえて分析することにはならないだろう。人間のあるがままの姿をとらえるためにも、自己のあるべき姿をめざして努力する人間の現実を無視するわけにはゆかないのである。

精神力動学は人間の現実を生活史的な縦断面から分析し、ひとりひとりの人間の行動が無意識的動因によつて決定づけられていることを明らかにしようとする。グループ・ダイナミックスは人間の現実を空間的な横断面から分析し、集団場面におかれた人間の行動が場面全体の斉一化の力によつて決定づけられていることを明らかにしようとする。いづれも人間存在の現実をある特殊な断面に裁断し、因果論的、決定論的にとらえているが、それらすべての因果的決定性をこえてた人なものかVとして存在しようとしている人間の具体的現実をみようとしなない。

たしかに、人間の行動が無意識的動因によつて、あるいは、集団的要因によつて制約されていることは認められなければならない。しかし人間のあらゆる活動がそれらの要因のいずれかによつて、一義的に決定づけられておけると考えることはできない。人間はただたんに無意識的衝動に駆りたてられて動く存在でもなければ、また、ある種の集団的雰囲気につきまされるまま群衆行動におもむく存在でもない。人間は周囲の状況の力に支配されながら、その力をはねのけて、自己個有のあり方をえらぼうとする自由存在である。少くとも、私たちは、ただ一方的に周囲の条件に支配されて行動す

るのではなく、周囲の影響力に抗して自己の自由の実現をめざすとはできる。

それゆえ、人間の全体像は、時間的、生活史的な縦断面と空間的、社会的な横断面を組み合わせただけでは浮かび上らない。具体的な人間存在は、たんなる縦断面によつても、また横断面においても決定づけられない、つまり、つねに因果的決定性をこえてたなにものかとして存在しようとしているのである。人間の行動は、ただたんに、無意識的な動因によつて過去から規定されているだけでなく、あるべき自己の可能性をめざすことによつて、未来から方向づけられている。人間はたんに無意識的衝動によつて駆りたてられる受動的な存在であるのではなく、能動的に未来の自己のあり方をえらびとりとする自由存在である。また、人間は、集団の中において、集団場面の決定力に支配されるままに行動する、たんなる自動人形であるのではない。どんなに強固な凝集力をもつた集団の中においても、ひとりひとりの成員が集団の齊一化への圧力に抗して、自己の個別的あり方の実現をめざすことはできるのである。

さて、このように人間における自由存在、個別存在の面を強調するとき、当然、精神分析に批判的な実存分析の立場が連想されることであろう。とくにフランクは人間の自由と責任性への顧慮を強くよびかけ、人間のあらゆる精神性への要求をたんなる衝動エネルギーに還元し、そのほかの行動決定因を認めようとし⁷ない精神力動学の考えをきびしく批判している。フロイトは人間に特有な価値志向性を快楽志向性にすりかえ、意味への意志の背後に衝動エネルギー

ーしかみないが、人間はたんに無意識的動因によつて決定づけられるものではなく、未来の目標をめざし、自己の生存の意味をできるだけ充実させてゆこうとする根源的な配慮によつて行動するものだというのである。

フランクの意図は、たんにフロイト的な精神力動学を攻撃することにあつたのではなく、すべて、人間をA……にすぎないものとみよ⁸うとする本質主義的見方をホームンクリスムスという言葉で呼んで否定することにあつた。今日では三つのホームンクリスムス——すなわち、生物学主義、心理学主義、社会学主義が支配的であつて、それぞれ、人間を反射ロボットとか、衝動装置とか、あるいはただの生産関係の産物にすぎないものに仕立ててしまつている。これらの学問は人間存在を制約している身体的、精神的、社会的な諸条件のみに注目し、宿命的な決定論にとらわれてしまつている。例えば、フロイトの考えにしたがえば、人間は幼児期に形成されたコンプレックスに支配されて、将来のパーソナリティの形成がすみずみまで予定されていることになる。だが、人間の行動はいかに遺伝や環境、あるいは幼時の体験に制約されているにせよ、人間にはあらゆる条件をのりこえてゆく精神の反抗力とでもいうべきものがあるではないか。これらの条件がどれほど強力であつても、人間は基本的に、これに対して自由に振舞える余地をもっているのだ。このように主張するのである。

十九世紀から二十世紀にかけての人間像は、人間をあまりにも多くの制約に縛られた、全く無力な存在に仕立ててしまつた。例え

ば、人間は生物学的、心理学的、社会学的な諸条件にどんなに縛られているかということ明らかにすることのみ専念し、人間の自由な、個別的的存在を見失ってしまった。これに対し、 Λ ……にすぎないもの V として決定づけられない人間の実存的な自由を強調し、人間が自己の可能性を自由に選びとる Λ 決断存在 V (ヤスペース)あるいは、 Λ 責任存在 V (フランク)であることを明らかにすることとはきわめて重要な意義をもっているといわなければならない。¹⁰⁾ わたしたちは、フランクとともに、未来の目標をめざし、自己の生存の意味を充実させてゆこうとする人間のあり方に注目しなければならぬであろう。では、わたしたちの Λ 人間存在のダイナミックス V というのは、フランクの実存分析、あるいはロゴセラピーと全く軌を一にするものであるかといえば、もちろん、否である。

フランクは人間の被制約性、被決定性に対し、人間の本来的自由、あるいは精神性を強調するあまりに、精神性を衝動性からぎり離し、人間個体に内属する本性的なものかに仕立てあげてしまった。精神的なものが衝動に還元されえない根源的現象であることを強調するあまりに、精神的人格をなにか実体的なものに仕上げてしまった。「精神性はたしかに生物学的にも、また解剖学的にも人間に固有なものである」¹¹⁾という言葉からもわかるように、彼は精神性を周囲から孤立した生物学的個体のうちに内属する固有な本性と考えているのである。しかし、はたしてすべての精神的志向がたんなる個体のうちに内属する本性の発現として、個体のうちから自発的に生ずるといえるだろうか、精神的志向といえども、たんにひと

りひとりの人間の内部から発現するものではなく、自己の内部と外部の相関、つまり、自己と対象的世界の相互関係をふくんだ全体的状況のうちからひきおこされると考えるべきではなからうか。

フランクは、自由、あるいは精神的志向を、たんなる個体のうちに内属する根源的本性の発現と考えることによつて、人間存在のダイナミックスを見失ってしまった。人間の活動を、周囲の状況からぎり離された個体に内属する本性の発現とみることは、古い能力心理学的考え方、あるいは、アリストテレスの発想法への逆もどりを意味する。アリストテレスによれば、すべての活動は自己のうちに潜勢的に内在する形相の本質を顕現してゆくことで、そこに Λ 可能態 V dynamis から Λ 現実態 V energia への発展が考えられた。¹²⁾ ちょうど柿の種が地に落ちて発芽し、生長して、何年か後には立派な木になるように、生物学的個体としての人間のうちには、精神的本性を発達させてゆく素地がひそんでいると考えるならば、全くアリストテレスの力学の考え方に従っていることになる。しかし、新しいダイナミックスは、レーヴィンが主張しているように、アリストテレスの考え方からガリレオの考え方へとという方向において追求するべきではなからうか。¹³⁾

アリストテレス流の力学の特徴は、生物学的概念を用いて、有機体の活動のみならず、物体の運動をも説明するところにある。その考え方によれば、あらゆる対象は他の対象によつて妨害されない限り、完成にむかつて、自らの本質の実現にむかつてすすんでゆく。だから、重い物体は重ければ重いだけ強く落下しようとし、一方軽

い物体は上へむかうのだとされる。レーヴィンの言葉をかりていえば、一つの対象の運動を決定するベクトルはその対象によつて完全に規定される。いいかえると、対象とその環境に対する関係にもとづくものではなく、いかなる場合でも周囲に、関係なく、常にその対象に属する性質である。これに反して、ガリレオ流の近代力学においては、一つの対象の運動を決定するベクトルは対象と周囲の事態をふくむ具体的全体によつて決定されるのである。

このように、一つの対象と周囲の事態とをふくむ具体的全体に眼をむけるというのが、レーヴィンなどの場の理論の根本前提であつた。彼らは、物理学的な場の理論を心理学的場の理論に適用することによつてアリストテレス流の能力心理学的考え方を打破しようとしたのである。従来の心理学は行動をおこす生活体とその対象物、また動作の展開する場面とをきりはなして考えていた。そして行動の発現を生活体に内属する形相の本質の発現ということから説明していた。つまり、行動の発現を生活体のうちにひそむ本能Vや知性Vなどの能力の働きに帰していた。これに対し、心理学的場の理論は、生活体と周囲の場面をそれぞれ独立、無関係に存在するものとして、切り離して考えないで、両者を緊密に連関した体系的場面の中において考えようとするのである。

ただし、レーヴィンなどが問題にしたA場Vというのは、あくまで心理学的A場Vであつて、人間存在がそこにおいて働くA場Vではなかつた。心理学的場において働く人間は、あくまで客観的観察の対象となりうるような生活体であつて、その生活体の行動を観察

し、記述する人間の主体的あり方は除外され、抽象されて考察されていた。例えば集団場面における各成員について、ひとりひとりに対する集団の誘引性の度を測定するというような場合にも、観測者自身はその集団の誘引性に支配されないで、集団の外側にたち、自由な地点に立つていなければならないはずである。しかしグループ・ダイナミックスは、観測者のそのような自由な、主体的あり方を考察の対象から除外してしまつてゐる。これに対し、私たちのA人間存在のダイナミックスVにおいては、かかる人間主体のあり方をも含めた、具体的人間存在がそこにおいて働くA場V、あるいはA状況Vを問題にしようとするのである。

人間存在の具体的現実とは、彼をとりまく周囲の状況を離れてはありえない。人間は集団場面におかれてゐるときのみならず、ただひとり、対象的世界とのかかわりにおいて存在しているときにも、状況を離れて存在しているわけではない。彼の行動は自己と対象との相互関係をふくんだ、全体的場面の力によつてひきおこされるのである。人間の精神的活動といえども、個体の内部にひそむ内在的本性の発現というかたちで、たんに自己の内部から自発的に生ずるのではなく、自己と世界との相互関係をふくんだ全体的状況の力によつてひきおこされるのである。しかし、精神的活動がこのように全体的状況の力によつてひきおこされるものであるとすれば、状況のうちにとらわれてありながら、人間はいかにして精神的自由を実現することができるのであろうか。この点が問題にされなければならないまい。ここに、わたしたちは、自由と状況という、きわめて困難

な問題につきあたらざるをえない。

場の理論も精神力動學もともに、人間行動の動因を緊張の解消という点に求める点においては一致している。この両者は、人間と周囲との間にいかにして緊張関係が生ずるかという点においては必ずしも一致しないが、いずれもみだされた平衡関係をとりもどそうとすることから行動がひきおこされると考えているのである。しかし、人間行動がたんに緊張を緩和させる生物学的機制によつてひきおこされるとするならば、人間は周囲の場面の力に対して全く受動的に反応しているにすぎないことになってしまう。そこにおいてはもはやいかなる意味においても人間の主体的自由を考えることはできない。しかし、人間はかならずしも緊張の緩和という動機にのみ決定づけられて行動するわけではない。むしろ反対に、緊張を激化させようとする方向にすすむこともある。この点に関しては、わたくしたちも、精神力動學や場の理論の一面性をフランクとともに批判しなければならぬ。緊張的対立に耐え、それをのりこえる方向において人間は自我を形成し、主体的自由の実現をめざしてゆくことができるのである。

もちろん、自己と世界との緊張的対立関係は人間が自主的にえらびとつたものではない。人間は世界における緊張的対立関係の中に投げおかれるのである。緊張は、人間の意志とは関係なしに、世界の中に障壁がおかれることによつて生ずる。人間の一次的志向が障壁につきあたつたとき、自己の内部に葛藤、軋轢が生ずる。これが緊張であり、この緊張を解消させる方向に行動がひきおこされる。

障壁の抵抗が少く、比較的容易に通過可能な場合には、ほとんど自動的に場面行動が発生する。この場合の行動は衝動的であるとよばれる。ところが障壁が人間の志向に対し強固な抵抗を示すとき、容易にはエネルギーが緊張解消の方向に発散されない。そこで、いかなる移行路をえらんで緊張を解消させるかという工夫がされることになる。迂回行動にでるか、代償行動に移るか、あるいはエネルギーを全く別の方向に転化させるか、というような選択がなされることになる。

この場合、人間は必ずしも、できるだけ抵抗の少い移行路をえらんで、緊張を解消させる方向にむかうとは限らない。むしろ、場合によつては、できるだけ困難な、複雑な移行路をとつて障壁を通過してゆこうとすることさえある。この場合には、人間のエネルギーは緊張の緩和の方向にのみむけられているということはできない。この場合の人間の行動は、場面の力によつてほとんど自動的にひきおこされたものではなく、従つて衝動的なものであるということではない。これは、いわば、知性的、あるいは精神的志向であるといわなければならない。

精神的志向もまた、場面の力、あるいは状況全体の力によつて生ずることにはかわりはない。しかしそれは十の誘引性をもつた対象の出現によつて、ほとんど自動的に発生する場面行動ではない。場面の力に全く支配されている場合には、十の誘引性をもつた対象の出現によつて生活体の内部に緊張が生じれば、直ちにその緊張を解消させる方向に行動が発生するはずである。これに対し、精神的志向

の場合には、自己の内に生じた緊張を直ちに解消させないで、むしろ、その緊張をながびかせることさえあるのである。同じく緊張解消の方向にむかうにしても、その仕方に関して主体の側に選択の余地が認められなければならない。例えば、最初の目標を達成することがほとんど不可能と思われるときには、なんらかの迂回路を通るか、あるいは代償行動に移行することがその場面の力に従順な態度であるが、その場合にも、あくまで最初の目標を追求することもできる。そのときには、主体の側になんらかの選択の自由があることが認められなければならない。

もちろん、世界の中における緊張関係の中になげこまれたとき、その緊張を全く解消しないままに放置することは許されない。その意味において、人間の志向の方向は基本的には決定されているといわなければならないであろう。しかし、精神的志向においては、人間の側に全く選択の余地がないほど状況の力によつて全面的に決定されているということはできない。対象と自己との緊張関係において、衝動的志向の場合には、対象の側により多くの決定性が認められるに對し、精神的志向の場合には、人間の側により多くの決定性が認められねばならない。もちろん、その精神的決定性というのは、対象とのかかわりを離れた個体の内部に本性的にそなわっているものではなく、対象との緊張的対立場面においてのみとめられる相対的なものである。しかし、それにしても、人間の側により多くの決定性を認めることができるということは、人間の行動が場面の力によつて全面的に決定されるものではないということを意味す

る。ここにおいて、状況を離れてはありえない人間のうちにおける自由を認めることができるのである。

しかし、状況における人間の自由を強調するあまりに、フランクのように、精神的志向を衝動的志向と全く切り離してしまい、人間の個体のうちに精神という独立能力を仮定することは許さるべきではない。なぜなら、精神的志向も衝動的志向も全く別種のエネルギーの発現とみることはできないからである。人間がなんらかの対象をめざすとき、自己と対象との間に障壁が出現すれば、人間は対象に対する緊張関係におかれる。そのときには、人間はなんらかの仕方で緊張を解消せようと努力せざるをえない。精神的志向も衝動的志向もこの緊張を解消する方向にむかつて発現するエネルギーであることにはかわりはない。ただその場合、いかなる移行路を通じて障壁を通過してゆくかによつてエネルギーが全くちがった仕方が発現するのである。

ある生活体の前に障壁が出現したとき、できる限り容易に通過可能な移行路をたどつて緊張の解消にむかうのが、その場面の力にもつとも従順な、自然的態度である。だから、障壁の抵抗度がきわめて高い場合には、対象との対立緊張が続くことを回避して、迂回路をえらぶか、または、そのときのエネルギーを全く別の方向に転化させてゆくのが自然の勢いである。衝動エネルギーがそのまま発現される場合も、転化あるいに転位されて発現される場合も、生活体の行動は場面の力に全面的に支配されている。そのときの行動に精神の自発性はみとめられず、それは衝動的行動であるとよばれる。

しかし人間は障壁の抵抗がどれほど強くても、迂回路あるいはエネルギーの転化によつて直ちに緊張を解消させる方向にむかうとは限らない。その場合にも、あくまで緊張の対立に耐えつつ、当面の対象にいたる通路をさがし求めることも可能である。この瞬間において、人間は対立を回避して緊張の解消にむかうか、それとも、あくまで緊張の対立のきびしさに耐えつつ、前進の進路を探索するか、いずれの道をえらぶかという決断を迫られるのである。いわば、前進か、それとも後退かという分かれめに、つまりA危機Vにたつてゐるのである。後退の進路をとることは、そのときの場面の力に従ふことであるから、きわめて容易であり、自然である。これに対し、前進の方向にすすむことは、いわば、そのときの場面の力に抵抗して行動することであり、より困難な道をえらぶことである。しかし、それによつて人間は精神的自由を実現してゆくのである。

人間が前進の方向をえらぶか、それとも退行的志向に転ずるかということ、つまり、衝動的に行動するか、自発的に行動するかということは、たんに人間の前におかれた抵抗の強さによつてきまるのではない。そのときの抵抗に対する人間の態度によつてきまってくるのである。障壁の抵抗の度合によつて衝動エネルギーがそのまま発現するか、それとも転化されて、精神的志向となつてあらわれるかという、それだけの相違であれば、精神の自由が働く余地は全く認められない。しかし、衝動エネルギーが精神的志向に転じたとき、人間の態度は、これまでの退行的、受動的姿勢から、前進的、

能動的、姿勢へと、はつきり変わるものである。その意味で、衝動エネルギーの精神的エネルギーへの発展においては質的飛躍がなされたともみることができる。

しかし、それにしても、衝動エネルギーから精神的エネルギーへの発展が可能であることは認められなければならない。精神的志向は衝動エネルギーとは全く別種の根源から発現する、より高次のものと考えられることは、精神的志向が衝動エネルギーのたんなる昇華、あるいは転位によつて生ずると考えることと同様、正しくない。人間の一次的志向が障壁に直面したとき、その抵抗度が低いときには、場面の力に支配されて、最短通路を通つて緊張解消の方向にむかう傾向をもつが、抵抗度がきわめて高いときには、その同じエネルギーが直ちに緊張を緩和する方向にむかわないで、緊張に耐えつつ、新しい進路を探索する精神的志向となつてあらわれるのである。その意味においては、衝動エネルギーから精神的志向への発展は連続的であると考えられなければならない。

しかし、衝動エネルギーから精神的志向への転化は、障壁の抵抗の度合次第で、場面の力に支配されて必然的にひきおこされる変化ではない。障壁の抵抗がいかに強くても、緊張の対立を回避しないで、前進的、精神的志向にむかうこともできれば、緊張に耐えることができなくて、退行的、衝動的行動にむかうこともある。衝動エネルギーの精神的志向への発展は、あくまで、前進か後退かという決断的状况における人間の選択によつてひきおこされるものである。この変化は、場面の力によつて緊張解消の方向にむかう力学的

連続変化ではなく、むしろ場面の力に抵抗する人間の決断によつてひきおこされる飛躍の変化なのである。しかしその飛躍によつてエネルギーの発展の連続性が断ちぎられることはない。それはあくまで同一のエネルギーの連続的発展のうちにおいて認められる質的飛躍なのである。

人間の自由な決断による質的飛躍を強調するあまりに、エネルギーの発展の連続性を否定するとき、精神的志向は、衝動エネルギーとは全く別種の根源から発する、一段と高次のものということになり、人間存在のダイナミックスは見失われてしまう。しかし、反対に、エネルギーの発展の連続性のみを強調して、そこにいかなる質的变化も認めないときには、衝動エネルギーから精神的志向への発展は、場面に働く力学的法則によつて必然的に決定づけられてひきおこされる過程ということになり、そこにおいては、いかなる意味においても人間の自由を認めることはできない。これに対し、人間存在のダイナミックスは、エネルギーの連続的発展のうちにおいて、A退行的、衝動的志向から前進的、精神的志向へVという質的飛躍をみとめることによつて、状況を離れてはありえない人間のうちにおける精神の自由を基礎づけようとするのである。

人間存在は、いかなる場合にも、状況を離れて、孤立して存在することはできない。つねに、状況のうちにあつて、対象との緊張的対立関係にまぎこまれて生存しているのである。その限り、人間はその場面全体に働く力に制約されて行動している。どんな人間も対象と自己との間におかれた障壁の抵抗率によつて影響をうけざるを

えない。障壁の抵抗が比較的少ない時には、最短の移行路を通つて緊張解消の方向に駆りたてられる。つまり、衝動的に行動する傾向をもつ。わたしたちの場面行動といえども、平衡の回復をめざして、現状維持的に働く生物学的機制（ホメオスタシスの原理）によつて支配されざるをえない。フロイトのいうように、人間のうちには外的障害のために放棄せざるをえなかつたA以前の状態を回復しようとするV根づよい傾向がひそんでいて、よほど強固な障壁につきあたらない限り、退行的、現状維持的方向にかりたてられるのである。

しかし、人間のうちにひそむ退行的傾向がどんなに根づよいものであるにせよ、人間はあらゆる場面において、平衡の回復をめざし、現状維持的に行動するとは限らない。例えば、現状維持的に行動している限り、生存の危機に直面するいうときには、人間はこれまでの退嬰的、消極的な生の態度を一変させ、新しい型の生活態度を生みだすことによつて、世界の局面に対応するよう、積極的、前進的に行動しなければならないのである。もちろん、死の危機に直面したときにさえ、自分のおかれた現状を直視しようとしないうで、退嬰的な、なげやりの生活を続けることもできる。死の危機に直面する緊張感に耐えることができなくて、疾病の中へ逃避してしまふこともできる。しかし、あくまで自分がおかれた現実と真剣にとりくみ、現状の危機を打解してゆくよう努力することもできるはずである。

つまり、この瞬間において、人間は、あくまで緊張感に耐えつ

つ、現状を克服してゆく前進的方向にむかうか、それとも直ちに緊張を緩和させる退行的志向に転ずるかという分かれめに立つのである。もちろん、このような死の危機に直面するときのみ、人間は△あれか、これかVという分かれめに立つのではない。人間はあらゆる瞬間において、前進か後退か、自由か隷属か、生か死か、というような分かれめに立つのである。人間は人間として生きる限り、つねに危機に直面し、△あれか、これかVの決断を迫られているのである。このような決断的状况に立たされたとき、人間は選ばないわけにはゆかない。自らの意志において選ぶようにしたいときには、すでに後退の方向を、つまり、退行的、現状維持の方向をえらんでいるのである。ここには、明らかに人間の選択の自由が認められるのである。

人間はあれか、これかを選ばなければならない危機的状况にたたされたとき、不安を感じざるをえないだろう。不安は危機的状况の中から生れる。逆にいえば、人間が不安を感じているというのは、あれか、これかという分かれめに立つている。つまり危機に直面しているということを意味する。しかし大抵の人間は内面の不安を直視しようとしなくて、不安から眼をそらし、不安から逃げてしまっている。つまり、パスカルのいわゆる△慰戯V *divertissement* を行なっているのである。だが、人間は自分がおかれた危機的状况から眼をそらさないで、あくまで緊張の対立に耐えつつ、当面の課題を追求してゆくことによつてのみ、おのれの精神的自由を実現し、人間性を充実してゆくことができるのである。わたしたちは、以下の

諸章において、このような危機的状况における人間のあり方を分析してゆくことによつて、もつとも深く人間存在のダイナミックな構造を究明してゆくことができるであらう。

(1) 精神力動学 *psycho-dynamics* とは、力動的心理学 *dynamic psychology* とよばれるものとはほぼひとしく、人間行動を心理学的場における力と力の関係と見る立場をひろくさしているものである。つまり、人間行動の動因を体系的に解明しようとする一個の科学であるのだが、この意味では、レーヴィンの *topology psychology* も、パプロフの条件反射学も、ハルやトールマンの新行動主義心理学も、ひとしく *dynamics* であるといえる。しかし狭義の精神力動学では、生活的、時間的な、いわば縦の力動学を強調するものが多く、フロイト、アドラー、ユングなどの立場を総称している場合にしばしばこの言葉が用いられる。

(2) フロイトの力動的心理学の立場は、その当時の物理学の影響下に形成されたものと考えられる。なかでも、ヘルムホルツによるエネルギー不滅の法則の発見が重要な意味をもつことを見逃すわけにはゆかない。この法則は、要約すると、エネルギーも、物質が量であるように、まさしく量であり、姿を変えることはあっても、消滅してしまうことにはないことである。例えば、ひとつの物体が冷たくなると、隣りあわせた物体が温かくなるという工合に、エネルギーが、ある体系のひとつの部分から消失すれば、必ずその体系の他の場所にあらわれると、いうわけである。

ダーウィンは人間を一種の動物と考え、フエヒネルは人間の心は科学の領域外にあるのではなく、量的にも測定できるのだということを証明したが、さらに、新しい物理学は人間についてのはるかに徹底した見解、つまり、人間はひとつのエネルギー体系であるという考え方を可能にしたのである。フロイトは学生時代エルンスト・ブリュッケの生理学の講義を聞いたが、それは、生物体は化学や物理学の法則のあてはまる力動的体系であるという徹底した考えをうちだしたものであった。若きフロイトはこの新しい力動的生理学に大いに魅せられたが、それから約二十年後に、力学の法則は人間の身体

に対してと同様、人間のパーソナリティにもあてはめうるという着想に到達したのである。cf. C. S. Hall, A primer of freudian psychology, 1954, chap. I.

(3) レーヴィン¹⁾は集団をひとつの力学的全体、dynamic whole として見て、全体としての集団がその構成要素とは独立に、それ自身の特性と働きをもつことを明らかにしようとした。「集団がそれ自身の特性をもっており、その特性はそれの下集団もしくは個々の構成員がもっている特性とは異なるものである」という事実の背後に何の魔術も存在しないのは、物質分子がそれ自身の特性をもっている、それはそれを構成している原子もしくはイオンの特性とは異なるものだという事実の背後に何らの魔術も存在しないのと同じである。物理学の分野におけると同様、社会的分野においても、力学的全体の構造的性質 the structural properties of a dynamic whole は、下位部分の構造的性質とは異なるものである。」K. Lewin, Field theory in social science, 1951, p. 191.

(4) 集団の構成員の間に相互依存性 interdependence があるということは、集団のどれかの下位部分 subpart に生じた変化は、他の下位部分にも影響を及ぼして変化を生ぜしめる、という性質があるということである。つまり、相互依存性は、各部分間の相互規定的關係すなわち相対的機能的關係と考えられる。全体のなかにおける部分は相互に依存しているが、同時にある程度の独立性をもっていることもできる。この關係をレヴィンはこう言いあらわしている。「部分 a は部分 b がある程度内の変化しか示さないかぎり、b に影響されることはないが、もし b の変化がこの限界をこえると a の状態に影響する。」K. Lewin, op. cit., p. 305.

(5) 集団の誘引性 (凝集性) の測定は、主として、個々の成員について集団への誘引の強さを測り、(例えば、ソシオメトリック・テストその他の質問紙法により) それらの測定値を総合するという方法によってなされている。そしてこの場合、集団の凝集性の程度をあらわすものとして、個々の成員についての入集団への誘引の強さ V の平均値を用いることが主張されている。

(6) 私たちは自分の意見や判断の妥当性を実際に確かめることができない場合、他の人びとの意見や行動を参照にし、彼らの意見や行動が自分のそれと同じものであれば、自分の意見や行動が社会的に裏づけられたと考えて安心する。このようなことから社会的規準 social norm がうまれたとされ、成員たちをそれに同調させるように、圧力が働くようになるのである。cf. Festinger, L. et al., Social pressures in informal groups, 1950, Harper.

(7) Cf. V. E. Frankl, Das Menschenbild der Seelenheilkunde 1959, Hippokraties-Verlag. 宮本訳「精神医学的人間像」(みすず書房)

(8) ホムンクルスというのはゲーテの「ファウスト」第二部にてくる人造の小人のことであるが、あたかもこうしたホムンクルスのように、エディプス・コンプレックスや、リビドーや、あるいはホルモンの小人があつまれば、それで人間ができあがると考えるような立場をフランクルはホムンクルスミスという言葉で総称して、反対するのである。

(9) 「人間は一般に、あらゆる条件を、それも精神の反抗力とでもいうものの力でなんとかして超えてこそ、初めて本来の意味での人間たり得る。」V. E. Frankl, Pathologie des Zeiteistes. 宮本訳「時代精神の病理学」みすず書房、一五七ページ。

(10) Vgl. V. E. Frankl, Ärztliche Seelsorge, 6 Aufl. 1952. 霜山訳「死と愛」二六ページ～二九ページ。

(11) 宮本訳「精神医学的人間像」九三ページ。

(12) 実在 (ousia) をその生成の過程において、いわば動態論的にとらえるとき、可能態 dynamis と現実態 energeia、または、潜勢と顕勢という対概念となる。このことは動植物の成長についてもよく理解することができる。例えば、もつとも原初的な段階における同類の二つの動物の胎児や樹木の種子は、その種を識別することは困難であろう。しかしそれらが成長すれば、一方は人間に、他方は類人猿になり、また一方は樺に、他方は桜になる。従つてそれらの識別がたい胎児や種子もすでに樺や人間になる可能性もしくは潜勢をもつといえよう。すなわちそれらは現実的には人間や樺ではないけれども、可能的には人間や樺であるということが出来る。質料はそこにおいて形相が実現されるべき可能態であり、形相はそれによつて質料を基体として意味づける現実態なのである。

人間存在のダイナミックス(一) 伊藤

(13) Vgl. K. Lewin, Der Übergang von der aristotelischen zur galileischen Denkweise in Biologie und Psychologie, Erkenntnis, I. Heft 6, S. 422-466.

(14) Cf. K. Lewin, A dynamic theory of personality: selected papers, 1935. 相良他訳「パーソナリティの力学説」岩波書店、二九ページ以下。

(15) K・レーヴィンのいうように、「近代物理学では、物理的ヴェクトルの存在はつねに数個の物理的事実の相互関係、特に対象の環境に対する関係にもとづいている。」(相良訳、三一ページ。)ガリレオ流の力学においては、軽い物体はその物体の環境との関係で上にむかう傾向をもつばかりか、物体の重量そのものがこの関係で決まるのである。このことはガリレオが落体の法則を研究する態度にはつきりあらわれている。彼は重い物体そのものを研究したのではなく、「自由落下乃至傾斜面上の運動」の過程を研究したのだという事実は、一つの対象の運動が、周囲の事態(ある傾きをもつた面、または落下する空間の障害のない垂直区域の存在)に関係づけて考究されたということを物語っている。

(16) この点についてはオルボートも次のように述べている。「動機作用は、われわれに平衡、休息、適応、満足、ホメオスタシスを求めさせるようなひとつの緊張状態であると見なされる。このような見地からいえば、パーソナリティは緊張をよめるといふ習慣の様式以上のなものでもない。こうした公式化は、もちろん、人間がもともと受動的な存在であって、ただ外部のゴールから印象を受けたり、それに答えたりすることしかできないものだ、という経験論の初期の前提と完全に一致するものである。この公式は、部分的な、そして場当りの適応にはあてはまるけれども、本来の努力の性質を表現するには足りない。こうした努力の特徴は、平衡への抵抗であってつまり緊張は弱められるというより、むしろ保持されるのである。」G. W. Allport, Becoming: Basic considerations for a psychology of personality, 1955. New Haven, p. 48~49.